犬の貴女は獣人族！？

ＮＩＮＥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
犬の貴女は獣人族！？

【Ｎコード】
Ｎ５５０３Ｃ

【作者名】
ＮＩＮＥ

【あらすじ】
一人暮らしで退屈な日々を過ごしていた、藤堂海翔家に獣人族の女の子（しかも、スタイル抜群）が住み着いた！！

出会いは何の前触れもなく突然やってくるものなのだ！（前書き）

ジャンルはコメディーですが、ラブも入ってます……多分

出会いは何の前触れもなく突然やってくるものなのだ！

「ひまだなぁ。こんな時にペットが居たら楽しいのになぁ…」

俺の名前は、藤堂　海翔（とうどうかいと）だ。俺は、借家に一人で住んでいる高校生。一人というのはかなりヒマなもので、いつも

「ペットが欲しい」だのなんだのを口にしている。

……しかし、ホントにペットが欲しいな。

出来れば、世話は面倒だからやらなくていい奴で、主人に忠実で…

……可愛い女の子みたいなのがいいなぁ（ホワァ～～ン）

などと考えていると、インターフォンが鳴った。

「誰だ？セールスならお断りだぞ、と。」

そして、扉を開ける。

「すいません。セールスならおことわ…り…？あれ？誰もいないぞ？」

俺は辺りを見回した。そして、扉の横でうずくまって呻いている人物に気付いた。

「……あの、どちらさんですか？」

俺は、今にも死んでしまいそうな声の主に尋ねた。

「ご、ご飯をくだ…さい…おねがい……します。」

……え？

いきなりご飯下さいって、何なんだ？この人は？つか、俺の質問に答えてよ！まぁ、図々しいけど、かなりやつれてるし、今ここで助けないと末代まで呪われそうだ。

「え！？……まぁ、良いですけど。放っておいたら死んじゃいそうですし。」

そう言って俺は、彼女を抱えて（自分で立つ元気が無いらしいので）居間まで連れて行き、さっきの夕食の残りと、白飯を彼女の前に置いた。そして彼女はご飯を一口食べると、物凄い勢いで食べ始めた。それを見ながら俺はいろいろと尋ねる。

「あの、貴女は誰ですか？」

「わはしのままえばーーー」

「あ～、口に含んだ物を食べてからお願いします。」

彼女はご飯をゴクッと飲み込んだ。

「私の名前は、ティルカナミレって言います。長いからカナで良いよ♪」

と、ご機嫌に答えて再びご飯にかぶりついた。

「それじゃあその…カナ…さん。随分と派手な格好ですね。犬の…コスプレですか？」

俺は、どう見ても犬のコスプレにしか思えない格好を聞いた。

「コスプレってなんですか？」

「いや…コスプレって言うのはですね、正しく貴女みたいな格好をした人の事ですよ！見るからに犬の格好じゃないですか！」

俺は、彼女に説明した。つーか分かってなくてそんな格好してるんすか！？

「コスプレじゃないもん！私れっきとした犬だもん！証拠にほら！尻尾動くし、耳も動くよ！」

「そんな馬鹿なぁ。人をからかうのもいい加減にしなさいよ？」

「からかってないもん！じゃあ良いよ！これを見せてあげる！」

そう言って、彼女は手に持っていた箸を机に置いた。そして彼女はうずくまって震え出した。

「あの、大丈夫で……！？！？」

彼女の体が、少しずつ変わっていったのだ。

さっきまで何もなかった肌から、犬の毛が生えてきて、手のひらは肉球に変わって、手足の爪が鋭くなって、顔が犬になった。それはもう、本物の犬だったのだ！！

「……。」

声が出ない。つーか俺の目の前で起きた出来事を上手く把握出来ない。

「どう、これで私が本物の犬って事理解出来た？」

俺の目の前にいる犬が、勝ち誇った様に言った。
さっきまでカナさんだった
ははははッ！！！！！！！！

そんな事ある訳ないじゃないですか！人がいきなり犬に変身するなんて事有り得るはずがない！
きっと、これは夢だ。神様がヒマだと言う俺の言葉を聞いてくれて、こんな夢を見せてくれたんだ。そうに違いない。夢ならほっぺた引っ張ればすぐに眠りから覚めるはずだ！！！……痛い。
何故痛いのだ！これは夢じゃないのか！いきなり人が変身したんだぞ！そんな事、人類の物理学的法則に反するじゃないか！有り得ない…あり得ないんだーーーーーーーーーーーーーーーーー

「あの～、もしも～し。耳からピンク色の変な液体が出てるぞ～。」

俺は我に返った。良かった、返れて。

「ねぇ、カナさんみたいな人ってこの世にどれだけ居るの？」

この質問で、この人類にどの位非科学的な生き物が存在しているのか分かる！……気がする

「ん～…結構居るんじゃないかな。私の住んでた所には１００人位いたから。」

ひ、百人ですか！そんなにいるんですか、貴女みたいな方は。アニメだけのキャラだと思ってたのに……この人と関わってると俺の現実がだんだんヤバい方向へ向っていく気がする……。

「そ、そうか。……そういえばさっき、住んでたって言ったけど、

そこはもう無くなったの？」

俺は何気なくそんなような事を聞いた。

「私、そこから出てきたんだ。まぁ、家出ってやつ♪」

そんな大事な事を笑いながら言われても……

「な、なんで家出なんか？」

「親と喧嘩しちゃってさ。今思ったら私も悪かったって思うけど、あの時は私も頭に血が昇ってたからね。そのまま親の話も聞かずに家飛びだしてきちゃった。だから私家に帰れないから、今住む所ないんだよね。だからさ、君の家に置いてくれないかな？」

いきなりそんな事言われても困るんですけど…

「え？！オレん家に！そんな急に言われてもなぁ…」

「別に良いっしょ！見た所部屋余ってるし、君しか住んでないし。それに、こんな美少女と一つ屋根の下で暮らせる事を光栄に思いなさい！」

実に一方的な感じの交渉だなぁ……つか、いつの間に元のお姿に！？

「いやいや、そんな事言われたって色々と問題がですねーーーーー」

「よ～し！決まりね！！」

無視かよ！肝心な所は全て無視ですか～

「で、キミ名前は？」

もう何を言っても無視される気がしたので、彼女の問い掛けに応じた。

「藤堂海翔ですけど……」

「カイトか！これから夜露死苦！！！」
あんたはどっかのスケバンかい！？
しかもいきなり呼び捨てだし…

こうして、俺とカナの生活が始まった。そして、この日から俺の日常は、非常識な日常へと変貌して行くのである。

出会いは何の前触れもなく突然やってくるものなのだ！（後書き）

続きが気になる貴方へ……思い浮かびません（T＿T）

苦手な食べ物ほど食べてみると意外に美味しかったりする。

朝、俺は何事もなく起きた。昨日の出来事が嘘みたいな、静かな朝でした。

「やっぱり昨日の事は夢だったんだなぁ。そりゃあそうだよな！こんなご時世に獣人なんているはずがーーーーー」

などと独り言を言っていると、台所の方から物音が聞こえた。

「……、ど、泥棒か！？人が寝ているすきにぃ！取っ捕まえてやる！！」

俺は、意を決して台所に飛び込んだ。そして犯人らしき人物の体を拘束した。

「さあ、観念しろぉ！！ってあれ？この匂いは昨日嗅いだような…」

「もぉ、なにすんのよ！海翔！寝ぼけてるんじゃなぁい！」

この声も昨日聞いたような…それに、このナイスな感触も昨日触ったような……

「こらぁ！海翔！どこ触ってんのよぉ！！キャァァ！！！！ーーーーいい加減にせんかぁ！！！！！」

『ガンッ！！』という鈍い音が俺の頭から響き渡るのを感じた。そしてそのまま俺の目の前が真っ暗になった。

「……と…！」
「…いと…！」
俺を呼ぶ声が聞こえる。凄く心地よい声だ。もう少し聞いていたいような…そんな声だ。
「海翔！ねぇ、海翔ってば！起きてよぉ！ねぇったら！」
目を開けるとそこには、スタイル抜群で顔も俺好みな女の子がいました。彼女は、俺が目を覚ましたのを確認すると、ホッとした表情を見せた。
「……あのさぁ」
俺の問い掛けに素早く応じてくれた。
「何なに？なんでも言って♪」
じゃあ、遠慮なく……
「貴女は、カナなんですか？」
「そうだよ？急にどうしちゃったの？……あ！もしかして、さっきので記憶飛んじゃった？」
「いや、記憶は飛んでない。ただ、昨日の事が夢なのかどうかを確認しただけだよ。そっかぁ、夢じゃなかったんだぁ。獣人って本当に居たんですね～」

そう言って、俺はまた布団に入ろうとしていた。

「ちょっと！なんでまた寝るんですか！」

「止めないで下さい！これは絶対夢なんだ！！きっと神様のイタズラなんだ！絶対そうなんだぁ～！！」

「海翔！！現実から逃げちゃ駄目！人はどんな事があろうとも逃げちゃ駄目なんだよ！！」

「現実か。そうだね…現実を見なきゃね。現に君が居るしね。わかった！もう逃げないよ！俺」

「うんうん。そのいきだ！頑張ってよ！」

そして俺は、また一つ現実を受け入れた。

「そいやー、カナって以外と柔らかかったなぁ（ポワワ～ン）」

「うふふ♪海翔ぉ、やっぱり永眠行っとくかぁ♪」

「え、遠慮しときます…」

「そうだ！ねぇ海翔、お腹空いちゃったよぉ！なんか作って～」

そう言って、カナは俺の肩に後ろから手を置いて、キッチンへ誘導する。

「俺も腹減ったしな。よーし、朝飯作るか！カナも手伝ってくれるよな？」

「あたしに手伝い頼むと泣くよ？いろんな意味で♪」

な、なんだ？この不気味な笑みは……

「ど、どうなるんだよ」

「それはそれは恐ろしい！言葉には出来ないような事がぁーーーー」

「って、ただ手伝いたくねぇだけだろうが！！手伝わない奴に朝食なんて存在しないぞぉ！！」

それはそうだ！働かざる者食うべからずとも言うからな。

「ち、バレたか。」

「バレバレだっての。世の中そんなに甘くない」

そんなこんなで、朝食が完成した。手伝うと言っても、自分のものを自分で作っただけである。

今朝の俺のメニュー

・白飯

・味噌汁

・スクランブルエッグ

以上

今朝のカナのメニュー・白飯

・豚の角煮（鬼の章）・コーンポタージュに見えるなにか

カナのメニューに疑問を抱きつつ、朝食を食べ始めた。

「なぁ、この『豚の角煮（鬼の章）』ってなんだ？なんで鬼なんだ？」

「食べてみる？」

「じゃあ遠慮なく……」

俺はカナの作った角煮を口に入れた。

「……ん！！！か、辛れぇぇぇぇ！！！」

「え？辛いかな？これが普通じゃない？」

お前の基準が気になるぜ。

「お前ってもしかして、辛いの好きだろ！んで、甘い物は苦手！！」

「すっご～い！何で分かったの？」

「なんでも知ってるのさ」

フッフッフ、俺に弱点を知られたら、厄介ですぞ（笑）「あ！そうそう。俺昨日デザート作ったんだった！」

俺はわざとらしくカナの方を向いて言った。

「え！デザートぉ！！！私も食べた～い♪」

よし！かかった！

「なんだ、お前も食うのか？しょうがないなぁ。そのかわり甘さ控え目だぞ？」

「良いよ！そっちの方が嬉しいし♪」

フッフッフッ！俺は甘い物が大好きなんだよ！この俺が甘さ控え目？笑止！！甘さ控え目を作る何てなぁ、フ〇テレビの中央にある玉が無くなるようなもんだ！

俺は、カナの前に昨日作ったデザートを置いた。

「うわぁ♪美味しそう♪♪いっただっきま～す！」

『ぱくっ』という、何とも在り来たりな効果音と共に、カナが俺の作ったデザートを口に入れた。あぁ、俺の作ったデザートっていうのは、プリンの事です。そしてカナの動きが停まった。

「ん？どーした？具合わりぃのか？もしかして甘すぎたか？でも、これが普通じゃね？」

俺は笑いが顔に出ないように隠すのが精一杯だった。すると、カナがプルプル震え出した。

「お、おい。大丈夫か？」

少しやり過ぎたかもしれない。しょうがない、謝るか。

「なぁカナ、実はこのプリンな、甘さ控え目どころか甘さ倍増なんだよ。わるかーーーー」

「お～いし～！海翔これ美味しいよ！海翔凄いね！こんな美味しい物作れるなんてさ♪♪」

俺はぼーぜんとした表情で彼女を見ていた。

「で、でもそれ甘さ倍増だぞ！市販の奴の2、3倍は甘いはずなのに！」

「私、こういう甘さだったらＯＫかも♪あぁ、美味しかった！海翔、またこのプリン作ってね？」

あまりにも美味しい美味しいと食べてくれたので、少し罪悪感があったんだけど、気付いてないなら、まぁ良いか。

「お、おう。任しとけ」

こうして、俺はカナの苦手を一つ克服させてしまった。仕返しは出来なかったけど、なんか嬉しかった。

人の親切さ、プライスレス（前書き）

久し振りに書いてみました。面白くないですが、読んで貰えると嬉しいです。サブタイと本文の関連性はありません。

人の親切さ、プライスレス

「よし！服を買いに行こう！」

海翔は唐突に言った。昼下がりのゆったりとした時間を破るかの様に言った。

「……どしたの？いきなり？」

カナは海翔の言葉に少し驚き、なぜ海翔がその様な事を言い出したのかを聞いた。

「だってカナの服装が気になってしょうがないし、そんなんで外を歩けないでしょ？」

海翔はカナの服装があまりにも肌の露出度が高いので、普通の服を着させようとしていた。

「え～、別に良いよ～。この格好の方が動きやすいし。」

「ダメです！そんな格好をした人は家に置いておけません。」

海翔は色々な心配をしていたのだ。
まずは自分自身の事。次にカナに対する事。次に自分の友達が見てしまった時の対応等々…。最初の二つは良いのだか、三つ目は流石にあんな格好をしていると誤魔化しようがない。その前に女の子が家にいる事がおかしいと言うのはこの際おいておこう。とりあえず、余計な誤解を招かぬための事であった。

「カイトがそこまで言うんだったら良いけど…私お金持って無いよ？」

「大丈夫！とりあえずお金はあるし、いい所も知ってるし。」

海翔にはお金の心配は無かった。何故なら親がかなりの企業を立上げているのだ。なので海翔の借りている借家も古臭く無く、ある程度高価な所だった。とまぁ、海翔の家庭説明はこれ位にしておこう。

「勝手に説明しといてどうでも良い様な言い方、やめて欲しいね……」

俺とカナは、商店街に来ていた。都会では無いので、あまり目立つ建物は存在しないのだが、この町の人にとっては一番の都会である。

「人が一杯だねカイト♪♪」

「そうだな。人が多いと嫌なんだけど、まぁ良いか。」

俺とカナはその商店街の一角にある、『山瀬洋服店』と言う所を目指していた。

「うわぁ、人ってこんなに沢山いるんだね♪♪♪」

「こんなので驚いているとは、まだまだですのぉ、カナさん」

「だって、私の居た所こんなに人いなかったもん。」

いったいカナの村はどれほどまでに小さいのだろうか？バチカン位かな？いや、もっとかも。

「と、着いた着いた。ここだよ。」

俺はそう言うと、店に入った。

「お～い伊織ぃ～。いるかぁ？」

と、俺は店の中で呼んだ。そして目的の人物が姿を表した。そして俺を見るなり声を上げて怒った。

「伊織さんって呼べって言ってんだろーが！！」

と、伊織は言った。そしてカイトの横にいたカナに気付いた。

「！と、お客さんか？」

伊織が俺に言った。

「えぇ。訳有りの。」

俺がそう言うと、伊織はカナの方をじっと見ながら、

「もしかして、カイトの彼女さん？」

その言葉にカナは頬を赤らめて右手を顔の前でぶんぶん振った。

「ち、違いますよ！ちょっと訳有りで家出した私を助けてくれただけですよ！！」

「そゆことぉ♪♪」

少し悲しかったが、その通りなので、悟られない様に返事をした。

「だよねぇ！こんな馬鹿に彼女が出来る訳がないし！！」

「伊織…酷いぞ。その言い方は……。」

「つか、何か用か？って、用があるから来たんだよな。」

俺は、さっきの言葉で落ち込んでいた。代わりにカナが答えてくれた。

「私の服を買いに来たんです。何も持たずに家出しちゃったから、服一着しか無くて…」

「家出したのか。それは大変だったなぁ。ていうか、君スタイル良いねぇ。羨ましいねぇ。」

そうなのだ。カナは、その年齢とそぐわないのだ。まだ１４歳なのに、胸が大きくて、ウエストもモデル並みに細くて、顔も奇麗で整っている。その体型はもう、人の常識を超えていた。少なくとも俺の常識だが…。

そして伊織もまた、俺の常識を超えたナイスバディなのだ。肌色は白くて、着物なんか着させれば、大和撫子の様な感じになるだろう。

「海翔、頭から煙が出てるぜ？」

俺は、伊織の言葉で我に返った。

「と、とにかくなにか服を買いに来たんですよ。」

「それなら、俺のあげようか？身長もあんまり変わんないし。」

「いや、でも貰うわけには。お金ならあるし大丈夫だけど」

「一着しか持ってないからこそあげらるんだよ。」

そう言うと伊織は、自分の部屋に戻った。

5分後、伊織は袋に詰まった大量の服と下着を渡した。

「サンキュ、助かったぜ、伊織」

「伊織“さん”だ！！」

「どうもありがとうございました。」

俺とカナは、伊織にお礼をして帰路に就いた。その時に変な違和感を感じたが、無視する事にした。

「見つけましたよ。ティルカナミレ・マナリアさん」

そこには見知らぬ女性の姿があった。そして、カナの名前の後に聞いた事のない単語を言い放つ。

「あんなか弱そうな男にくっついているなんて、可哀相なカナ……」

と、同情めいた事を言い、顔は笑っていた。ものすごく奇麗な顔だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5503c/

犬の貴女は獣人族！？

2010年10月15日10時17分発行